

*Raffiné Journal vol.15*

照れ屋という手がかり

表現には、  
その人の内側が乗る。

だからときどき、  
言葉や音が  
すぐには外に出てこない。

出せないのではなく、  
出すことにわずかな抵抗がある。

ある音楽家が、  
初めてソロ曲を作ったときのことを語っていた。

グループの曲は、  
メンバーを思い浮かべるだけで  
自然とアイデアが浮かぶ。

けれど、  
個人としての音楽になると、  
自分がどんな音を愛し、  
どんな音楽を作りたいのか、  
まだ手探りの状態だという。

その言葉の最後に、  
こう続いていた。

「少し照れ屋なところも  
影響しているのかもしれない。」

その一言が、  
少し引っかかった。

グループの中では、  
関係がある。

誰が歌うのか。  
誰の声に合うのか。  
どんな役割がそこにあるのか。

誰かを思い浮かべることで、  
表現の輪郭が先に立ち上がる。

関係が、  
表現の外側を先に用意する。

けれど、  
ひとりになると  
その外側が消える。

思い浮かべる相手も、  
役割もない。

残るのは、  
内側だけになる。

何を作りたいかは、  
すでに内側にある。

ただ、  
それをそのまま外に出すことに、  
わずかな抵抗がある。

「照れ屋」という言葉は、  
その接続点に生まれる現象を指している。

作品には、  
その人の内側が乗る。

だから表現は、  
技術だけでは決まらない。

内側をそのまま外に出せるかどうか。  
その通り道がどれだけ歪まずに保たれているか。

そこで、  
表現の輪郭は決まる。

内側をそのまま出すことは、  
少しだけ、照れる。

R.

Raffiné Journal vol.15  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné